慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211　内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時　午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

第84回北里記念式挙行

北里賞　丸山　哲夫（慶應義塾大学医学部産婦人科学（産科）准教授）
「雌性生殖器官の幹細胞システムの解明と再生医学への展開」

北島賞　竹内　裕也（慶應義塾大学医学部外科学（一般・消化器）准教授）
「上部消化管疾患に対する新しい低侵襲外科治療法の開発」

北島賞　石井　賢（慶應義塾大学医学部整形外科学 専任講師）
「脊椎脊髄疾患における新規・低侵襲治療の確立」

第84回北里記念式が6月12日午後1時から北里講堂で行われた。この式は初代医学部長・北里柴三郎先生の命日に際して行われる。優れた研究実績を称えて、基礎系に北里賞、臨床系に北島賞がそれぞれ授与される。

昭和26年に北里先生の偉業を記念して北里賞が始まり、昭和33年に第二代医学部長・北島多一先生を記念した北島賞が加わった。今年度、北島賞には6名の候補者の中から2名が選出された。

北里賞受賞の丸山氏は、子宮内膜の再生と破壊に着目し、子宮内の幹細胞の存在と、その異常と疾患との関係を解明した。

北島賞の竹内氏は、腹腔鏡による胃や食道の手術の有効性と術後のQOLとの両立を果たした。

同じく北島賞の石井氏は、整復による治療が困難な環軸関節回旋位固定に対する効果的な治療法を示した。

式典は、北里先生への黙祷から始まり、厳かな空気に包まれた。3名の受賞者を称えて、清家篤塾長、岡野栄之医学部長、武田純三三四会長、北里一郎氏がご挨拶された。

清家塾長は、北里先生と福澤諭吉先生との固いつながりに触れた。福澤先生の恩に報いた北里先生になぞらえて、その精神が新棟建設にも息づいていることを述べた。

岡野医学部長は、死に至る感染症に挑んだ北里先生と北島先生の叡智に思いを馳せ、基礎と臨床とがいまこそ一体となり、社会のシステムを構築することの意義を強調した。

武田三四会長は、戦後日本の医学・医療が近代化される中で、両賞が国内外に向けて果たしてきた役割を改めて確認された。

北里一郎氏は、福澤先生からの援助と独立不羈の精神とを紹介した。さらに、「権力や武力を好まず、尊くて侵しがたいもの」のために尽力する精神が同賞を通じて継承されていることを述べた。

また、北里研究所から藤井清孝理事長、小林弘祐学長、石館武夫常任理事、渋谷明隆常任理事、東原正明理事、北里英郎理事、菊池史郎理事、長屋信博理事、梶英輔常任監事、川上倫副学長が出席し、受賞を祝った。

華々しい授賞式と記念撮影ののち、受賞者三氏の15分間の講演が行われた。講堂に詰め掛けた多くの聴衆からの祝福の拍手に包まれ、無事閉式となった。（4年　峯岸駿多）

武田会長と丸山哲夫先生

今年度受賞者の集合写真（上段左から比企能樹連合三田会会長、武田純三三四会長、北里一郎氏、清家篤塾長、戸山芳昭常任理事、増野匡彦常任理事、岡野栄之医学部長、下段左から丸山哲夫君、竹内裕也君、石井賢君）

新病院棟 Ⅰ期棟建設
＝６月の進捗状況＝

7月竣工へ

建設中の新病院棟1号館I期棟（地上6階、地下1階）は本年7月21日の竣工を目指し、工事の最終段階をむかえています。5月末現在で外装工事はほぼ完了しました。

1、2階部分はブラウン系のタイル張りで、その上層部分には色調を含わせベージュ系の塗装がなされ落ち着きのある重厚な外観となっています。また1号館のシンボルとなるペンマークも取り付けられました。現在は各階の内装仕上げや配管・配線工事などが行われています。

この1期棟には放射線治療、CT・MR、生理検査、病棟（2看護単位）などが入る予定です。竣工後は旧棟からの移転作業を約2カ月で完了させ（放射線治療など一部を除く）、9月からは段階的に2期棟建設エリア（中央棟北側、7号棟、放射線治療棟、CT・MR棟、臨床講堂など）の解体工事が始まります。スケジュールが順調に進むと、2016年3月には解体工事が完了し、いよいよ新病院の本丸である2期棟（地上10階、地下1階）の工事が始まります。

三四会員の諸先生には益々のご支援をよろしくお願いいたします。
（新病院棟開設準備室長　渡辺真純　64回）

竣工を間近に控えた1号館1期棟（右側）、左には2号館が見える

募金の声

社会的責任を考える

医療法人ハート　広島HARTクリニック顧問　高橋　克彦（産婦50回）

私は昨年、24年間続けたクリニックを後継者に売却し、現在は週3日だけ診療をしている身である。わが国初の体外受精（IVF）専門外来クリニックとして故郷広島市に開院して以来、IVFやその関連技術（ART）で誕生した生命は、関連施設を含めると1万人近くになる。開院当時は、IVFは大学病院中心に患者を入院させて行っていたので、少なからずの批判があったが、2012年度にわが国で実施されたARTの症例数は30万件を超え、出生児数は3万人を超えて、全出生児27人に1人がART児という結果が報告された。累積出生児数は30万人を超えており（全世界で約500万人）、わが国は世界最大のIVF実施国であり、そのほとんどは外来で行われている。

先端医療に携わった当時は国内外の学会、研修会参加はもちろん、常に情報収集に心がけ、試行錯誤を繰り返しながら、患者さんと一緒になって目標（妊娠）達成を目指す日々であった。それが精子注入顕微授精法、胚盤胞移植法、胚ガラス化法（凍結法）と現在では最も汎用されている技術の開発に繋がった。この間多くの諸先生、科学者の方にお世話になり感謝するとともに、自分は運が良かったのだと思っていた。ところがその後、縁あって京都大学再生医科学研究所よりES細胞作製のために、不要になった凍結胚（胚盤胞）の提供を要請され、1年間の倫理委員会審査の後、文部科学省の承認を経て提供することになった。良質のES細胞ができたと教えてくれたのは、iPS細胞作製にかかわった山中教授グループの一番弟子高橋和利君で、私の甥っ子である。このような経験をすると、私がこの道に入ったこと、その後の各分野の先生方との出会いは全て偶然ではなく、必然であったと信じるようになった。そして慶応の医学部で過ごした楽しい6年間も偶然ではなく、その結果私が米国でのレジデント、研究生活の機会を得たのも必然であったと考えざるを得なくなった。

先端医療を維持、継続していくためには人材養成、品質管理システム、危機管理は欠かせない。そのためにISO9001を取得し、その目標である顧客満足の向上を目指してスタッフと改善作業を続けるうちに、企業の社会的責任ということを学んだ。大企業は当然であるが、総勢30人の小さなクリニックでも顧客（患者）満足を得るには、従業員の技術、サービス向上は不可欠である。そして従業員もクリニックにとって大切な顧客であり、彼らの満足なくして患者満足の目標は達成できないことを学んだ。良質なクリニックを継続していくことは社会的責任であり、そのためには後継者育成が必要である。

この必然と社会的責任を考えると、リタイアを決めた私に今するべきこと（できること）は母校への寄付であるという結論に達するのは難しくなかった。寄付した後も、これも必然であったと思っている。

春の叙勲

紫綬褒章受章

東大名誉教授　藤田　敏郎（51回）

このたび、藤田敏郎東京大学名誉教授が本年春の紫綬褒章を受章されました。藤田先生（51回）は、永く高血圧・腎臓病分野で教育、研究、診療に尽力され、内科学の発展に大いに貢献されました。食塩の過剰摂取が高血圧の原因であることは古くから知られていましたがその機序は謎であり、藤田先生は、一貫して「食塩による血圧上昇と臓器障害発症のメカニズムの解明」に取り組まれてきました。

川崎市立井田病院での臨床トレーニングを終えた後、米国国立衛生研究所（NIH）に留学され、そこで食塩により高血圧が生じやすい「食塩感受性」の人と、生じない「非感受性」の人がいるという「高血圧の病態の多様性」の概念を提唱され、帰国後動物実験で食塩感受性高血圧に交感神経緊張による腎ナトリウム排泄異常が関わることを示されました。さらに東京大学医学部腎臓内分泌内科では、腎ナトリウム排泄異常にエピジェネティクス機構が関与することを世界に先駆けて明らかにされました。

一方、食塩感受性高血圧の発症にはミネラルコルチコイド受容体（MR）の活性化が関わることが知られています。藤田先生はRacがMR活性化に関わるという、思いもよらない経路が存在することを解き明かされました。特筆すべきは、これらの基礎研究で得られた結果を、我が国では実施困難とされた医師主導の二重盲検比較臨床試験によって証明されたことです（BYALUATE Study）。このように臨床で未解決の課題を基礎研究で明らかにし、基礎研究で得られた成果を臨床に還元する"Physician Scientist"としての道を自ら示されてきています。先生は現在も精力的に東大先端研で、生活習慣の歪みによる高血圧と臓器障害の発症に関わるエピジェネティクスの研究を進めていらっしゃいます。

また、日本内科学会、日本高血圧学会、日本腎臓学会及び日本内分泌学会の会長を歴任され、Hypertension誌などの一流国際誌のEditorを現在も務められています。これらの高血圧学、腎臓病学における卓越した業績対して数多くの表彰を受けられ、平成26年には国際高血圧学会（ISH）の最高名誉賞Franz Volhard Awards（日本人初）ならびに米国心臓病協会（AHA）高血圧部門の最高栄誉賞The Excellence Award for Hypertension Researchを受賞されています。

この度のご受章を心よりお祝い申し上げますとともに、先生のご健勝と益々のご活躍を祈念しております。

（東京大学先端科学技術研究センター特任准教授　丸茂文史　69回）

瑞宝双光章

矢高　仰兒（眼専3）
〈学校保健功労〉
飯田文化協会　初代会長、矢高眼科医院、元学校医

瑞宝双光章

高木　巖（48回）
〈保健衛生功労〉
元愛知県がんセンター、元愛知県知多保健所長

紫綬褒章

藤田　敏郎（内科学研究功績）（51回）
〈内科学研究功績〉
東京大学先端科学技術研究センター教授
東京大学名誉教授

旭日重光章

丸木　清浩（精46回）
〈私学振興功労〉
元埼玉県議会　副議長
元埼玉医科大学　理事長

旭日重光章

丸木　清浩（46回）
埼玉医科大学名誉理事長

平成27年春の叙勲で旭日重光賞を拝受いたしました46回生の丸木でございます。身に余る光栄であります。

この度、私が拝受いたしましたのは、在学中からご指導いただきました先輩諸氏、同級生、友人、同僚、部下等の多くの方々の御指導御鞭撻の賜物であります。僭越ではありますが、去る5月8日宮中に参内して、私が皆様の代表として安倍総理より勲記を伝授していただきました。心から感謝申し上げます。

私が、慶應義塾大学でお世話になりましたのは、東京オリンピックも無事に終了した昭和40年前後のことであり、旧制高校時代の雰囲気が残っている学園の中で、クラブ活動など学生生活を謳歌し、充実した学生時代を送らせていただきました。我が国の科学の進歩が著しく、特に臨床検査、画像検査などの進歩が、医療や技術に影響を及ぼし、旧時代の医療から新しい時代の医療への胎動が顕著になってきた時代でありました。

慶應大学医学部は、伝統的に臨床を重視する実学教育を大事にして参りましたが、当時の新しい時代の医学医療技術の台頭は、在来の医学教育や医療との葛藤をもたらし、私たちにも影響を与えて参りました。私たちは、「患者さんを一生懸命に診なさい」という指導を強く受けた時代であったかもしれません。医療の原点は、当然のことながら患者さんをしっかり診ることでありますから、医師として当然のことでありますが、その後経営者としての仕事をするようになってからも多くの人々をよく理解することに大変有意義なことでもありました。卒業以来、私は丁寧に人に接するという姿勢をずうっと現在までも貫き通しており、慶應医学の教育に感謝の念を持ち続けております。

戦争中軍医を増強するために臨時医専が設置されました。その卒業生である先輩方がお年を召されて引退する時代になり医師不足が叫ばれ、一県一医科大学の構想のもとに各県に医学部が設置されることになりました。埼玉県におきましては、所沢に防衛医科大学の設置が決定しておりましたが、栗原浩県知事を始め、埼玉県にも私学を設置しようという運動があり、私の父が中心となって、当時埼玉県唯一の総合病院である毛呂病院を寄付し、医学部を設置することになったのであります。

埼玉医科大学の初代学長の落合京一郎先生は、新しい時代の医学教育を創造するという旗頭でありましたので、随分と苦労は致しましたが、私は設立準備の事務局長として、教えを頂きながら埼玉医科大学の設立を何とかまとめあげることが出来たのであります。新設医科大学の設立準備に取り組んだ当時の何年間かは、そのため夜も2～3時間しか眠れない日々も続き、私の生涯でも最も多忙であった時期と思われます。

私は、大学設立後まもなくして重症の気胸に見舞われ、手術は成功しましたが、薬の副作用等による劇症肝炎で死線をさまようことになりました。当時の医療では、劇症肝炎を救う道はほとんどありませんでしたので、当時大量に使い始めたステロイドホルモンをリスクはあるが使うことになったようです。若いこともあり、ステロイドが劇的に効き、ほどなく退院するまでに回復いたしました。退院後、父を訪ねたところ「これからどう生きるのか」という質問があり、私の命は自分のものであるが「これから私の命は自分のものでなく世のため人のために捧げたい」と申しました。父はしばらく黙っておりましたが「それは大変なことだぞ」と申したのであります。その後、10年間ほどは、世のため人のためにということでやりぬいて参りました。なかなか困難を伴い、難行苦行の10年でありましたが、良くしたもので理解者も徐々に増えてきました。

そして、50歳過ぎになってから埼玉県議会議員となり、地方自治の仕事の関わるようになりました。この仕事は、医療の在り方社会福祉の在り方を勉強する良い機会となり、20年在職し勉強させていただきました。

今齢75歳になり振り返りますと、病気の時に決心した「世のため人のために生きる」ことを守り抜いて、現在まで生きてきたことが、自らの生涯を後悔しないで過ごすことになった、と今は自らに言い聞かせております。これからも生きている限り、その根本的姿勢を守りつつ、生き抜きたいと考えております。

患者さんのために医療は何ができるのかという患者中心の考え方で、埼玉医科大学では「Your HAPPINESS Is Our HAPPINESS」を合言葉にして、理想的な医療環境を構築しようと努力をしているところであります。埼玉医科大学の母体である社会福祉法人毛呂病院は高齢者福祉障害者福祉などを手掛けており、連携を取り医療と福祉の融合した理想郷が出来ればと考えております。卒前卒後教育にも生かしていただければと思っております。

慶應義塾大学医学部の益々のご発展と同窓会の皆様のご健勝をお祈りし、受章の御挨拶といたします。

瑞宝双光章を受章して
―三四会諸兄姉に守られ続けた私の人生―

高木　巖（48回）

私は、外科医として愛知がんセンターで働いていた平成2年6月14日、千葉市で行われた食道疾患研究会に参加中、45歳の年齢で、壇上で脳梗塞で倒れました。2年近い療養生活の後、臨床医を断念し、不自由な体でも可能な仕事として、保健所長のポストを与えて頂きました。誠実に仕事をし、社会的責任だけはしっかり果たそうと考えつつ、65歳の定年まで働かせて頂きました。その結果が今回の受章につながったと思っています。

私は44年信濃町を卒業し、当時名古屋の私の自宅から歩いて10分の距離にある愛知がんセンターで胸部外科部長をされていた唐沢和夫先生（29回）から温かいお誘いを受け、外科医としてのスタートを切りました。したがって外科への入局の経験は無く、医局費も1円も払っていませんが、学位は井上正教授（29回）のもとで頂きました。

当時三四会愛知県支部の支部長をされていた冨田稔客員教授（冨田病院長・38回）のもとで幹事をしていたこともあり、保健所長退職後は、不自由な私を、冨田院長をはじめ病院あげてアシスト下さり、昔冨田家が代々本宿代官をつとめていたこともあり、地域での信頼は厚く、モンスター患者は全くいません。相変わらず不自由な体ですが、不完全燃焼で終わっていた臨床医としての生活は、おかげで実に楽しいものになっています。

現在はご長男の冨田裕院長（72回）のもとで梅本俊治先生（54回）や岡本尚先生（56回）とともに、今までの人生の中で最も楽しい日々を過ごさせて頂いています。

文中の私の先輩の方々は全て故人となられましたが、それらの三四会の先輩方や今までお世話になった全ての方々に感謝し、後輩への不義理を恥じつつ、筆をおきます。

鑑知来

疾病構造の変化が話題になることが多い。さいたま市郊外に在る筆者の小児科診療所も、この問題と無縁ではないようだ。開院からの約15年間で、一部の感染症は明らかに減少し、また、軽症化した。Hibと肺炎球菌を起炎菌とする髄膜炎は、感染症動向調査によれば、ワクチンの定期接種化で激減した。ロタウィルス感染症はワクチン導入により重症例が減り、ひどい脱水を伴う乳児が稀になった。各種ウィルスや溶連菌に対する迅速診断キットの利用は病原体の特定を可能にし、より適切な治療の選択や家庭、保育園、学校等での感染拡大の抑止に寄与しているだろう。一方、輸入感染症や新興感染症に関する知識、感染制御全般における知識を求められることは多くなった。

アレルギー疾患、発達障害、頭痛や心の病気、生活の質に関わる夜尿や便秘などの相談は年々増加する印象がある。さいたま市においては、学校及び保育所での食物アレルギー生活管理指導表の提出が義務化となったことなどから、食物アレルギーや口腔アレルギー症候群の患児の来院が急増した。学習障害、ADHDといった発達障害の相談や頭痛、心の病気で来院する子供も多い。これらの疾患に対する関心が、家族だけでなく養護教員や保育士らの間で高くなっているからだろう。夜尿や機能性便秘で悩んでいる子供も思いの外多いようで、外見が全く元気な子供の来院が増えている。ここで問題となるのは専門医が少ないことである。発達障害や心の病気は診断、治療、療育、教育等各分野の専門家の関与を必要とするため、専門施設に紹介することも少なくないが、さいたま市周辺で受診するには数カ月待つ必要がある。重症の食物アレルギー患児や難治の夜尿症患児を専門医に紹介する場合も数週間待ちのことがある。

専門医を育てることは無論重要だ。同時に、専門外であっても、これらの子供達やその家族に適切に対応できる小児科医の育成が、なお一層、求められることだろう。

（小児科竹田クリニック　竹田周吾　61回）